

津軽石  
区域

# 「地域の宝」マップ

～鮭の恵みと  
歴史・文化の里～

## つがるいし 津軽石区域について

津軽石区域は宮古市の南部に位置し、山田町と接しています。宮古湾にも接しており、深くまで入り込んだ内湾では波が小さくアマモなどの海藻類が生息し、豊かな生態系を形成しています。晩秋に津軽石川を遡上する鮭の群れは、古くから津軽石の人々の生活を支え、北前前船などを通し江戸へと運ばれました。交易により財を成した盛合家の人々のほか、多くの文化人を輩出しています。かつての中世城館跡には神社が祀られ地域の信仰の場となりました。信仰から生み出された、多様な民俗芸能は各保存団体や、小学校の授業などを通じ現在も伝承され、未来へ繋がっています。

### 宮古市文化財保存活用地域計画とは

市内に点在する歴史や文化・風習を保護し後世へ残していくため、地域の方や市内のみならずと文化財を活用し地域の魅力を深めていきたいと考えています。そのため、宮古市では地元で眠る「地域の宝」を、9つの区域ごとに「宝マップ」にまとめて後世に伝え残す活動をしています。

編集 宮古市文化課(令和8年7月20日発行)  
〒027-0097 岩手県宮古市嶋山1-16-1 TEL 0193-65-7526  
印刷・製本 川口印刷工業株式会社



※本マップの発行にあたり、令和7年度岩手県地域経営推進費補助金の助成を活用した

## つがるいし 津軽石のひと

### 13 盛合 魯齋 盛合家

(1810～1866年)

盛合家は長い歴史のなかで同家は多くの人材を輩出しました。例えば江戸後期～末期の当主・魯齋は、学問・詩文・書画に優れ、山崎友仙(観山の兄)・文道貫機(津軽石の瑞雲寺17世住職)とともに地元の青少年たちを教育し「閉伊の三傑」と称されるほどでした。慶応2年6月12日、57歳で没。津軽石の盛合家歴代墓地に眠っています。



盛合魯齋墓碑

## 近世邸宅 盛合家

### 13 盛合家住宅主屋 国登録有形文化財 建造物

盛合家は、江戸時代中期から廻船問屋として江戸商人と交易を行い、商家として発展しました。後に武士の身分を与えられたため、家屋は商家造りと武家造りが一体となった全国的に珍しい建築様式となっています。享和元(1801)年に伊能忠敬ら測量人一行が宿泊するなど、数多くの文人墨客が訪れ、多くの書句や絵画が座敷の屏風・衝立などに残されています。



盛合家住宅主屋

### 14 盛合氏庭園 国登録記念物 名勝

寛政9(1797)年に、盛合家が藩主南部利敬の宿所として使用されるのを契機に整備されました。主屋の南面に広がる庭園は江戸から造師を招いて造らせたと言われ、「心字ヶ池」の中央に亀石を配しています。池泉は石組で護岸されており周囲にサツキやツツジを配し、背後には築山が築かれています。19世紀ごろの三陸沿岸に伝わった庭園文化がうかがえる庭園です。



## 浜街道とJR 三陸鉄道



浜街道は今も津軽石稲荷神社の例祭で神輿渡御の主要ルートとなる(写真は津軽石新町バス停前)

### 49 浜街道

津軽石の街並みは、三陸沿岸を南北に縦断する浜街道沿いに江戸時代初期から形成されました。津軽石中心部の浜街道は、金浜から南へ馬越坂を越えて本町・新町を通り、渡船場から津軽石川を渡って藤畑へ続くルートです。近年三陸沿岸道路の工事によって馬越坂の一里塚が失われてしまいましたが、盛合家付近の柵形跡や渡船場跡の大きな榎の木・石碑群など、現在も旧道の名残が残っています。



旧街道の調査を行っている方のHPです

### 50 三陸鉄道 津軽石駅

近代に入ると街道とともに鉄道も整備されます。県民の悲願だった内陸と沿岸を結ぶ山田線は、昭和9年に盛岡―宮古間が開通し、同14年には金石まで南へ延伸しました。しかし平成23年の東日本大震災で宮古―釜石間が壊滅的な被害を受けます。その後復旧工事を経て、平成31年にJR東日本から三陸鉄道株式会社へ移管されました。この区間で旧山田線時代の駅舎が残るのは宮古駅と津軽石駅のみ。特に津軽石駅は修繕されていますが昭和10年開業当時の木造駅舎がほぼそのまま現存し、昭和レトロの雰囲気味わえる貴重な場所となっています。



開業当時の津軽石駅



現在の津軽石駅

## 津軽石川と鮭



1907年の鮭漁(岩手県立水産科学館蔵)

### 47 津軽石川と鮭

津軽石川は石が多いため、水温が安定し栄養に富んだ伏流水が流れ出て鮭のふ化・生育に適しています。江戸時代には津軽石の「南部鼻曲がり鮭」が盛岡藩の名産のひとつとして江戸に届けられました。鮭の需要が増すにつれ漁場の確保が問題となるも、盛岡藩により漁を行う日が定められ、鮭の資源保護をはかる種川制度も組み込まれました。昭和48(1973)年からは宮古鮭まつりが開催され、2011年の東日本大震災までは津軽石川で鮭まつりが開催されていました。

### 11 鮭のふ化 津軽石鮭養殖保護組合

津軽石では明治38(1905)年から鮭の人工ふ化場を開設しました。しかし、大正時代までは自然繁殖に頼っていたため、毎月8日までを禁漁日とし自然産卵の期間を設けていました。昭和48(1973)年には人工ふ化に一本化され、昭和56(1981)年には史上最高の漁獲高を更新しました。また、この年から行っている「さけ稚魚壮行会」では、市内の小学生などがさけ稚魚を放流しており、津軽石小学校では稚魚の飼育も行っています。



さけ稚魚の放流

## もの のふ たて 武士たちの館あと

### 24 弘川館跡

弘川館跡は、標高65mの丘陵地に築かれた山城です。16世紀に築城されたと考えられ、館跡の中心となる主郭や砦のほか、敵の侵入を防ぐ堀跡などが残存しており戦国時代の姿を今に残しています。南部一戸氏の三男が津軽石に入った当初は沼里館に拠点構えていたようですが、その後、弘川館を築き津軽石氏を名乗りこの地域を治めていたようです。館跡を思しき石造の小祠が残されています。

### 19 沼里館跡 判官神社

沼里館跡は、標高40mの丘陵地に築かれており、西側に続く尾根を空堀で切り、主郭とその周囲を帯郭で囲む単純な構造の山城です。また、主郭の先端に砦があり津軽石川河口から宮古湾を一望できます。津軽石氏の勢力が増すにつれ、手狭となった沼里館から弘川の地へ移っていったものと考えられます。近年の発掘調査で空堀跡や主郭には複数の建物跡が確認されており、主郭内の構造をうかがい知ることができます。

## 鮭漁とまつり

### 10 又兵衛まつり 稲荷神社の石碑群

江戸時代に後藤又兵衛という武士が飢えに苦しむ農民のため鮭留の板を破り、農民を救いましたが藩の役人に逆ざねにされました。又兵衛の死後に鮭が遡上しなくなり又兵衛のたたりだとして、遺体を供養したところ鮭が再び遡上し始めたと言われています。

その伝承から津軽石稲荷神社に五輪塔が建てられ、毎年鮭の豊漁を祈り津軽石川のほとりで神事が執り行われています。11月末の神事後、2月頃まで又兵衛を模したY字型の人形が川岸に建てられます。



又兵衛まつりの神事

### 9 アンバ祭り 津軽石稲荷神社

津軽石稲荷神社の例大祭は「アンバ祭り」と呼ばれ、その年の鮭漁の大漁を祈り祭典が行われます。祭典の後は神輿が旧津軽石の中心部を巡り、津軽石に伝承されている「津軽石さんさ踊り」や「法の脇獅子舞」などの民俗芸能、創作太鼓の団体が神輿の前後で盛り上げます。



津軽石さんさ踊り

法の脇獅子舞



## 生業と信仰

### 45 藤畑駒形神社

へいよりもと おとはごぜん 閉伊頼基の妻「音羽御前」が愛馬の亡骸を埋め、供養したことから始まったと伝えられています。この一帯は馬産地であり、駒形神社はその鎮守であったと考えられます。50年ほど前まで人々の生活は牛馬と深く関わっていました。境内には日露戦争時の馬魂碑が祀ら、堂内にも牛馬の絵馬や額絵などが納められています。旧暦の4月20日には祭礼が行われ、市内だけではなく遠野から参拝者が訪れるなど、牛馬の関係者からも信仰されています。



馬魂碑

### 38 山神塔

赤前の山中には山神の碑が鎮座しています。かつての山は入会地であり、村内で区画を定め木の実や薪など得て、生活していました。赤前地区の人々は薪木の伐採や家の改築時に木を切る際に、山中にある山神の碑を拝んだと伝えられています。現在も山から流れる沢水を生活飲用水にしてしており、山と関わり合いながら生活しています。



山神塔



山崎観山

